

遠隔学習支援の体験が教員志望の学生の教育観・教職観に与える影響

Effects of Distance Learning Support Experience on Views of Teaching and Teaching Profession of University Students Who Aspire to Become Teachers

稲田 優輝^{*1}, 北澤 武^{*2}

Yuki INADA, Takeshi KITAZAWA

^{*1} 東京学芸大学教育学部, ^{*2} 東京学芸大学教職大学院^{*1} Faculty of Education Tokyo Gakugei University,^{*2} Graduate School of Teacher Education Tokyo Gakugei University

Email: a171404f@st.u-gakugei.ac.jp

あらまし: 本研究では, 小学生を対象とした遠隔学習支援に教員志望の学生が参加することで, 学生の教育観・教職観がどのような認識になるかについて明らかにすることを目的とする. 結果, 教職観について, 協働学習に関する項目が向上したり, 児童の学習意欲が高まったと認識したりすることが分かった.

キーワード: 遠隔学習支援, 教員養成, 大学生, 教職観, 教育観

1. はじめに

文部科学省は教員養成段階において, 学生の教育観・教職観の理解を高めることを求めている⁽¹⁾. 学生の教育観・教職観を高める方法の一つとして, 放課後学習として遠隔による学習支援に, 学生が参与する方法がある⁽²⁾.

山崎ら(2018)の実践では, 中学生を対象とした遠隔学習支援において, 学生1名に対して1, 2名の生徒によるテレビ会議であったが⁽²⁾, 本研究では小学生を対象とした遠隔学習支援を行う. そして, これに参加する学生の教育観・教職観が, 遠隔学習支援後にどのような認識になるかについて明らかにすることを目的とする.

2. 概要

2.1 調査対象

本研究に参加したのは教育学部生8名と大学院生1名の計9名であった.

2.2 対象とした児童

自治体Xの小学校6年生18名が対象となった. これらの児童は, 経済的支援と学習支援をする児童であり, 保護者の本人の同意の元, 自治体Xと大学の支援を受けて放課後に集まった者であった. 学習支援は2019年5月22日~7月17日の毎週木曜日, 16時~17時30分, 全9回(1回90分)実施した.

2.3 遠隔学習支援について

遠隔学習支援に参加した大学生は, 児童の要求に合わせて, 毎回, 教科や単元を変えながら目標を設定した. そして, 現地の支援者と共通の問題を準備し, 担当する児童と画面を介してやり取りを行った.

2.4 使用したテレビ会議システム

児童は一人一台のタブレット端末環境のもと, テレビ会議システム ZOOM Cloud Meetings を使用した.

3. 遠隔学習支援の流れ

表1は, 遠隔学習支援の流れを示した表である.

表1 学習支援の流れ

	時間	学習活動
1	5分~10分	挨拶, 本日の目標設定
2	70分~80分	タブレット端末による遠隔学習支援
3	5分~15分	振り返り, 次回の学習内容の確認 児童解散
4	20分~30分	現地支援員と遠隔学習支援を行った学生との反省会

第1に, 学生はインターネットを介して1対1, 1対2で児童と通信した. 学生は児童に近況を報告させた後, 児童の日常生活や学習状況を把握した.

第2に, 学生は本日の学習活動を児童と一緒に計画し, この内容をワークシートに記入させた. その後, 学生は個々の児童が設定した目標に合わせて事前に準備された問題を児童に提供し, 取り組ませた. 学生は児童の実態に応じて, タブレットを活用した調べ学習を促した. そして, 学生は児童がつまづいた部分を, 対話や画面に映し出された児童の記述内容から把握し, これについて指導助言した.

第3に, 学生は, 今回学んだことや次回の目標設定について児童に確認する振り返りを行った.

最後に, 遠隔学習支援が終わった後, 学生は現地の支援員とテレビ会議で反省会を行った. 具体的には, インターネットを介した画面越しでは把握できなかった児童の実態を確認したり, 各々の児童が掲げた目標を共有したりした.

4. 分析

第8回目の学習支援後に, 学生の教育観と教職観に関するアンケート調査を実施した. アンケート項目は児童の学習意欲に関する内容など, 教育観に関する項目を11項目, および「教職観」に関する内容の24項目⁽³⁾の全35項目(5件法)で構成した. 各項目の回答結果について肯定, 否定の傾向を分析するために, 母平均を中央値(3)とするt検定(対応なし)を行った.

表2 アンケートの回答結果(有意差が認められたもののみ抜粋)

項目	平均値	標準偏差	t 値
1. 児童はテレビ会議による学習支援を楽しんでいた。	4.56	0.53	8.85 ***
2. テレビ会議による学習支援は、児童の学習習慣を身に付ける上で効果的だった。	3.78	0.83	2.80 *
3. テレビ会議による学習支援は、児童の学習意欲を高める上で効果的だった。	4.11	0.60	5.55 **
4. テレビ会議による学習支援によって、児童が「勉強が分かった」と認識する場面があった。	4.67	0.50	10.00 ***
5. テレビ会議を介した自分(大学生)の存在が、児童の学習意欲に影響を与えていた。	3.89	0.60	4.44 **
6. テレビ会議による学習支援によって、児童と良い関係を築くことができた。	4.44	0.73	5.97 ***
12. 遠隔支援に参加することで、常に子どもから学び、共に成長しようとする姿勢が身につく。	4.44	0.53	8.22 ***
15. 遠隔支援に参加することで、子どもに対する自己の課題を認識し、その解決に向けて常に学び続けるようになる。	4.11	0.78	4.26 **
18. 遠隔支援に参加することで、組織の一員としての自覚を持ち、他の参加者と協力して職務を遂行することができるようになる。	4.11	1.05	3.16 *
19. 遠隔支援に参加することで、他の参加者の意見やアドバイスに耳を傾けることができるようになる。	4.56	0.53	8.85 ***
20. 遠隔支援に参加することで、子どもに対して公平かつ受容的な態度で接し、豊かな人間的交流を行うことができるようになる。	4.11	0.78	4.26 **
23. 遠隔支援に参加することで、社会状況や時代の変化に伴い生じる新たな課題や子どもの変化を進んで捉えようとするができる。	4.00	0.87	3.46 **
24. 遠隔支援に参加することで、気軽に子どもと顔を合わせたり、相談に乗ったりするなど、親しみを持った態度で接することができるようになる。	4.00	0.50	6.00 ***
27. 遠隔支援に参加することで、板書(ホワイトボード)、話し方、表情など授業を行う上での基本的な表現力を身に付けることができるようになる。	4.00	1.12	2.68 *
28. 遠隔支援に参加することで、子どもの反応や学習の定着状況に応じて、授業計画や学習形態等を工夫することができるようになる。	3.78	0.44	5.29 **
31. 遠隔支援に参加することで、今まで気づかなかった子どもの実態を理解することができるようになる。	4.33	0.71	5.66 ***
32. 遠隔支援に参加することで、子どもと接する上で自分がより身に付けなければならない能力に気づくことができるようになる。	4.56	0.53	8.85 ***
34. 遠隔支援に参加することで、子どもに自分の理解度を把握させる指導ができるようになる。	4.11	0.78	4.26 **
35. 遠隔支援に参加することで、子どもに勉強の楽しさを理解させる指導ができるようになる。	4.11	0.33	10.00 ***

* $p < .05$; ** $p < .01$; *** $p < .001$

5. 結果と考察

5.1 アンケート結果

表2はアンケートの回答結果を示した表である。以下、詳細を示す。

5.2 学生から見た児童の学習意欲

有意差が認められた項目のうち、平均値が中央値(3)を超えた肯定的な回答と判断された項目は、項目4 ($t(9) = 10.00, p < .001, r = .96, M = 4.67$ 、項目5 ($t(9) = 4.44, p < .01, r = .84, M = 3.89$) など6項目であった。結果、遠隔学習支援で児童が「勉強が分かった」という場面を学生は認識するなど、山崎ら(2018)の研究を支持した結果となった。

5.3 学生の教職観

項目18. ($t(9) = 5.16, p < .05, r = .75, M = 4.11$)、項目19 ($t(9) = 8.85, p < .001, r = .95, M = 4.56$) などにおいて有意に平均値が高く、肯定的な認識であった。自由記述に着目すると、「タブレットを使うとどうしてもズレが生じてしまうので、そのズレをなくすためには両場所で話し合いを重ねることが重要だと学べた(8件中1件, 12.5%)」の意見があった。教職観において、支援者は支援者同士での協力による課題解決を遠隔支援から期待できることが分かった。

また、項目12 ($t(9) = 8.22, p < .001, r = .95, M = 4.44$ 、項目20 ($t(9) = 4.26, p < .01, r = .83, M = 4.11$ 、項目23. ($t(9) = 3.46, p < .01, r = .77, M = 4.00$) の子ども理解力に関する3項目において有意に平均値が高く、肯定的な認識であった。自由記述に着目すると、「どのように計画を立てていくかを一緒に考えていくことが必要(8件中3件, 37.5%)」、「性格を考慮すること、様子をうかがうことが必要(8件中2件, 25.0%)」などの回答が得られた。これらのことから、遠隔学習支援にかかわることで、上記に関す

る学生の子ども理解を深めることが期待できる。

6. まとめ

本研究では、小学生を対象とした遠隔学習支援に教員志望の学生が参加することで、学生の教育観・教職観に変化が認められた項目を明らかにした。結果、教職観について協働学習に関する項目が向上した。さらに、学生は児童の学習意欲が高まったと認識することが分かった。また学生は、協働学習による課題解決や、経済的支援を有する子どもとの交流を通して、子ども理解力を高めることができることも分かった。

今後の課題として、学生の教科指導力を高めるための学習支援をデザインしたり、児童と学生の学習支援の過程を録画して、両者のやり取りを質的に分析したりすることが挙げられる。

謝辞

本研究は、東京学芸大学児童・生徒支援連携センターと科研費基盤研究C(18K02814)の支援を得た。

参考文献

- (1) 中央教育審議会(2006) 今後の教員養成・免許制度のあり方について(答申). http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1212707.htm (2020年1月23日参照)
- (2) 山崎浩一郎ほか(2018) 経済的支援を要する中学生に遠隔地から学習支援を行う学生の教職観に関する実践的研究, 日本教育工学会研究報告集, 17(1), pp.217-224
- (3) 北澤武, 森本康彦(2015) 教職実践演習の到達目標の達成を目指した ICT 活用によるカリキュラムデザインと評価, 日本教育工学会論文誌 39(3), pp.209-220